
悟空転生

榊田珪赤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悟空転生

【コード】

N9866U

【作者名】

榊田珪赤

【あらすじ】

ある引き籠もり半二ト不登校児な少年・西光寺玄の前に現れたのは、日本に転生した孫悟空。

「お師匠様（仮）！」

果たして、玄は本当に玄奘の生まれ変わりなのか？

妖怪×バトル×近未来×ストリート・ファイト？

現在自サイトにて連載中の話です。

第一話「斉天大聖」

東勝神州傲来国は花果山の生まれにして水簾洞に住まいては美猴王。天に登りて弼馬温、天を騒がせた後仏門に帰依し、俗世の罪を離れては鬪戦勝仏と成った。

彼の名を、 斉天大聖孫悟空。

彼は突然目覚めた。

突然、この世に生まれ落ちたのだ。女の腹も、石の卵も通らずに、彼は唐突に存在していた。

最初は一体何が起きたのか、彼にもわからなかった。事態を把握したのは先ず頬を撫でる冷たい風に気付き、次に耳から音を得て、次

にその目に映る色彩の奔流を知ってからだった。

吹き荒ぶ北風、クラクションにエンジン音、何処かの交差点から響く調子外れの古風なメロディに、聳え立つ摩天楼は様々に安っぽい光を湛えている。行き交う人々。道端に寝転ぶ死体のような浮浪者。客引きをする風俗店の看板持ち…

明晰なる頭脳はこの状況下から予測され得るだろう全てを理解した。「…は、」

道の真ん中で棒立ちになっていた彼の肩に、一人の中年男がぶつかった。小柄な肩はしかし、よろめかない。

余りに異様な雰囲気には圧倒的な存在感に、ぶつかった男がこわごと振り向く。

「はははははははは！」

気狂いのような何々大笑。大音量。周囲に在る眼球が悉く一点を見据える。

長い、長い咆哮だった。大気が震えていた。

「っ、は、は…」

息をすっかり吐き出すと、彼は深呼吸した。肺の調子は上々だ。腸の具合も悪くない。

「お、おい君…」

人の良さそうな壮年の男が観衆の総意を代弁しようとして声を掛けるが、しかし次の瞬間、彼の姿は最早見えなくなっていた。

続け様に響いてくる笑い声。

強いビル風が耳殻を擦った。彼は中空にいた。瞬きの間に跳躍したのだ。にい、凶暴に口角を上げて笑う。唇の隙間から剥き出しになった犬歯が冷たく乾く。

重力に従って落下しながら、また吼える。

「この手！足！」

濁った大都の空に、赤い瞳が金に光る。翳した手が足が映り込む。

「まさしく人だ！人のものだ！」

白い骨に肉が包まれるはこれも毛のない肌。尻に尾もない。変化は

していない。長い手足が、その証。

押し寄せる歓喜と共に雲を蹴り、高き摩天楼をまるで木の如くして舞う。次はあちらへ今度は此方へ、めまぐるしく駆け上がりそして悪戯に下降し、鉄骨を孕んだ塔を弄ぶ。

一際高い塔を見付け、其方に飛び移ると、彼はその外壁の僅かなでつぱりに手を掛けた。そのままぶらぶらとぶら下がりながら、此処は何処かと確かめようと、広い視界に河を探す。

すると彼が現れたのは展望台の硝子の向こう。中の凡夫は驚き婦女は叫んで喧しい。仕方なしに尖った天辺へと登り、今度こそ全てを臨む。

ややあつて、下から作業着姿の男が二人やって来た。

「君！一体、何をやってるんだ！早くこっちに来なさい！」

強い風に煽られて、彼の髪が靡く。

「ハッ！」

この程度の、高さ。

「誰に口聞いてやがる」

振り向く。紅蓮の瞳が黄金に光る。例の、牙を見せた凶暴な笑み。

高らかに名乗る。

「俺こそは斉天大聖、孫悟空！貴様らにこの孫さま、止められるもんなら止めてみやがれ！」

次の瞬間、彼は身を投げ出していた。あっという間に姿は遠く、下方の雑踏へと紛れてしまった。塔の上には声の余韻が残るばかりである。

第二話「電気街にて悟空に逢う事」

時は西暦二千百余年を数え、人々は黄昏を迎える。

緩慢にしかし無限に発展する文明は憂いとなって滞積す。

街の喧騒は華やかにしかし風に混じるは腐臭にも似た不快さを伴う。類廃の薰り。

しかしそれも駅を離れた場所にあつては薄くなる。今も昔も寂なるは寺社仏閣なり。

だが、その寺にも近世ならではの澱はあるもの。件の寺の離れのそのまた隅の隅、薄暗く停滞した空気の生臭い部屋に、一人の少年が居た。

髪は調髪を忘れざんばらに長く、眼鏡は指紋に汚れて白く曇る。肌の色青白く、筋は痩せて見るに忍びない。虚ろな瞳が光るのは液晶画面の反射によるもので、凡そ生氣と呼べるものがなかった。

彼の名は西光寺玄。この寺の一人息子である。

齢十七を数え、所謂引き籠もり歴は三年。高校に籍を置くも未だ進級ならず、あと少しで除籍といった具合なのだが、唯一の取り得である学力からぎりぎりそれを免れていた。とどのつまりは青春のどん底、半ニートである。ある意味では時代の申し子とも言えよう。

さてそんな彼が何時ものようにネットサーフィンに勤しんでいると突如として焦げ臭い臭いが鼻を突いた。さては外で親父が炊き上げでもしているのだろうと無視していたが、塩化ビニル特有の臭いがきてはそうもいかない。おかしなと思つてみると、液晶画面にはエラーが点滅し、スピーカーがけたたましく警告音を発した。

「って、うわあああああ！」

同時にパソコンの本体から黒い煙が上がり、彼は慌てて電源を引っこ抜き、何とか火事は免れた。

が、

「…ど、どうしよう……」

非常に残念な事に、彼は若い身空で立派なパソコン中毒患者であった。

泣く泣く物の溢れる部屋からパソコンの本体を廊下に出し窓を開け、外装を取り外して具合を見て、そして泣きたくなった。掃除を怠ったが故に部屋を舞っていた埃は悉く電子回路を侵略し、面白い位よく燃えていた。

こうして彼はありったけの預金を下ろして世界一有名な電気街へと足を運んだのだが、この時はまだ、今日こそが受難の日々の幕開けだとは気付いていなかった。

焼けたアスファルトが陽炎を放っていた。

もう九月に入ったっていうのに、異常な暑さは続いている。

新しいパソコンを買いに来たけどこのままじゃ倒れそうだからもう今日は帰ろうかなでもこのまま面倒臭いからってパソコンを買わずに帰ったらずっとパソコンを買わないままで、そしたら何もしなくなるのかな？それは嫌だな何となく怖いな、何て無駄な事を考えた。

「はあ…この暑いのによくやるよね、全く……」

大通りの片隅では、四角く引かれた白いラインの中で二人の筋肉質な男が戦っている。

折しも今は押しも押されぬストリート・ファイト・ブーム。結局の所、時代が幾ら進もうが人々の退屈を紛らわせるのは人間同士の野蛮な闘いだって事だ。僕には全くもって理解出来ないけど、古代口

「マの時代からそうだったって決まってる。きつとDNAに刻まれてるんだ。どうしようもないね。」

耳障りに騒ぐ野次馬の隙間を縫って、近くの店に入る。

「っ、あー…涼しー…」

これでもかとはかりにきいた冷房。エネルギー問題に二酸化炭素削減対策に地球温暖化：今はもう全部過去の話。資源の無限循環システムが作る安定した平和と退屈。ああ、だからあんなのが流行るのか。

「お客様、何かお探しですかあ？」

わざとらしく媚びた声を作った、小柄な女性店員が声を掛けてきた。

「あ、いえ、その、ちよつとパソコンを…」

「あー、パソコンですかあ？でしたらこちらのコーナーにあるのがオススメですよ。最新のより一個前のモデルなんですけどお、今ならお値段も現金お支払いでお安くなってますしい…」

しまった、この店、店員の押しが強い店だ。

さあ、一体どうやって逃げようかな、と思った丁度その時だった。

ガシャアアアアアン！

轟音と共に目の前の壁が壊れて、棚とかそこに置いてあった家電とかコードとかその他諸々が吹っ飛んだ。

砕け散った壁の破片か、はたまた棚の陰に溜まっていた埃なのか、正体のよく分からない粉塵に視界が遮られる。何度か噎せると同時に、よく通る声が耳に入った。

「おー、悪イ悪イ。失敗した」

全然・本当に・微塵も悪いだ何て思っていない声だった。

「っ…」

嫌な予感しかしない。こういふのには覚えがある。根っからの体育

会系　それも、自分の才能を傲慢にも自覚していない人種の口調だ。

「よっ、と。あつたあつた」

そう言いながら瓦礫を踏み付けて入店してきたのは、長い髪を一つに縛った少年だった。ちよつとびっくりする位目鼻立ちが整っていて、手足が驚く程長い。今すぐにもアイドルになれるんじゃないかというレベルで、顔とスタイルだけでリア充が約束されてそうな感じた。

なのに、喋り方や動作に一々愛嬌みたいなものまで垣間見える。間違いない。これはスクールカースト最上位の人種だ。

「おい馬鹿猿、早くしろつて！」

「るッせーよ！テメエ後でクロス！」

軽口を叩きながら、少年は床に突き刺さっていた鉄パイプを無造作に引き抜いて去って行った。店員や客が悲鳴を上げているのも、すぐ近くで戦っていた筈の男二人が揃って腰を抜かしている事をもガン無視して…もしかして、あの鉄パイプを投げて壁を壊したのだからか？いや、まさか。

つい、何が起きているのかと気になって、外に出た。勿論、きちんと出口から。

彼が真っ直ぐに向かったのは、すぐ近くにある、四角いラインの中だった。先程よりも四角の一边が大分長い。しかし、大きさに関わらず、ルールは一つだ。誰でも知っている。試合開始の合図と共にバトル・ゾーンに一步踏み込んだらそこはもう戦場だと。

「よし、この孫さまに挑むとは中タイキの良い奴らだ！どっからも掛かってきやがれ！」

やる気満々、というよりは寧ろ殺る気満々、といった様子の声が入垣の向こうから聞こえて、どうにかこうにか隙間に体を押し込んで、見える位置まで移動する。

パキッ！ドカッ！

人混みの中から顔を出したのと同様だった。さっきの少年とはまた

違った、二、三歳は年上であろう、これもまた容姿に恵まれた少年が立っていた。

染めているのか、短く刈り込まれた髪はまるで血のように赤く、切れ長の瞳は冷淡な印象を与える。典型的なモデル体型で、しかしよく観察してみると、結構な筋肉質であるのが分かった。細身だが身長はかなり高い。両手両足に、細い金の輪を付けているのが印象的だ。

地べたに転がった若者二人の姿に、さっきの音は赤い髪の彼が二人をノックアウトしたのだと分かった。

それに対し黒髪の、孫と名乗る少年が怒鳴る。

「おい、一人で楽しんでんじゃねえよ！こつちにもちったあ回せ！」

「武器使用可でお前がやったら普通に死ぬだろ」

「手加減位出来らあ」

どうやら二対二の変則ルールで戦っているようだ。相手はチームを組んでいる喧嘩屋らしく、二人倒れば即座に次の二人が出てくる。ギャラリーに混じっている柄の悪そうなのが大体そうなのだろう。

赤い髪の方が強そうだと見るや、それぞれ金属バットを持って、一斉に孫へと襲い掛かる。

が、彼らは気付いていないのだ。今自分が攻撃しようとしている人間が、鉄パイプを棒切れのように扱っている事に。

「へっへっへっへ…」

ニヤリ。孫が犬歯を覗かせて笑う。

次の瞬間、大柄な男二人が吹っ飛んだ。圧倒的だった。空を斬る鉄パイプの音しか聞こえなかった。

しかし、我を忘れて見入ってしまった程だったが、そうもいかなかった。何故なら僕は、彼が吹っ飛ばした喧嘩屋にドグシャアと潰されたからだ。

更に、頬を鉄パイプの先が掠めるっていうおまけ付きで。

「あー…生きてっか？まあ死んでたら死んでたで自己責任だろうけどな」

「確かにそうだが殺すなよエテ公。殺人は色々と面倒だ」

「こん位で死ぬかよ。おい、生きてるならさっさと立てよ」

鉄パイプを使って男の巨体を押しのけると、孫少年は行儀悪くしゃがんで僕の顔を覗き込んだ。

「う、わ…」

至近距離から見たその目は、燃えるような紅蓮の目だった。不思議に美しい赤の色彩が、一体どんな仕組みなのか金色に光を弾いている。

太陽の色だ。

「…ん？」

まじまじと観察していると、その目が更に大きく開かれた。

「んんんん？」

ずい、端正な顔が更に近くなる。高い鼻梁と僕の眼鏡が触れそうになって、やっと少しの距離を取って首を傾げる。

「…お師匠様」

「…へ？……」

ぼそりと呟くように零れ落ちた言葉を脳が認識するより早く、世界が反転した。

「え！？」

よく晴れた空に浮かぶ入道雲と電線、それに安っぽい街路樹の葉。と、そこらに転がっていたと思しき警告色ソーントンカラーのロープによって見事に縛り上げられた自らの両手両足。

「悪い。先に帰る」

「は？いや、ちょっと待てこの猿…！」

「後は任したぜ甥っ子よ」

連れの抗議に耳も貸さずに、彼は豚の丸焼き状態の僕を鉄パイプに引っ掛けて走り出した。

「わあっ！わあああああ！…！」

普通に走っている車を一台一台三台と追い越し、結構な長さのある階段の段を無視してジャンプされた所で、キャパオーバーを迎えそうになった後、僕は気絶した。と、というかキャパオーバーを迎えた。胃袋的な意味で。

第三話「仮設浄土にて茶を飲む事」

一人の女が、簡素ながらも清潔なキッチンに立っていた。

白で統一された中に、一個だけ明るいグリーンの物体が目立っている。それは緑色の薬缶で、絶叫するのを今か今かと待っている。

薬缶の様子を横目で伺いながら、女はガラスのティーポットに緑茶の茶葉を用意している。横には一つ、ロックアイスを沢山入れたグラスがある。

さて、実に優雅な手つきで茶の用意をしている女は、身体的に目立った特徴こそないものの、間違いなく美人の部類に入る人間だった。即ち、目立った特徴がない、というのは顔にある全ての部品が理想的な形をしていて、絶妙な場所に収まっているという事だ。正に奇跡の美貌。穏やかな微笑がよく似合う。敢えて身体的特徴を挙げるとすれば、女性にしては長身な所だろう。確実に百七十センチ以上はある。

白いカッターシャツと黒いスラックスの上には白衣。緩くカールした黒髪をすつきりとアップに纏めている。

ピイイイ...

けたたましく薬缶が鳴った。

「ん、あ...」

その音によって、西光寺玄は目を覚ました。ぼやける視界から何とか愛用の眼鏡を手探りで探すと、自分が居るのが誰かの部屋であるのが分かった。モデルルームのように整ってはいるが、どこことなく生活感がある。恐らくはリビングだろう。彼はそのソファの上に横たわっていたのだ。

「ああ、気が付いたようですね」

一杯のアイス・グリーン・ティーを手に、女は優しげに声を掛けた。事情は飲み込めないもののその雰囲気から礼儀を払うべき相手だと察して、会釈してグラスを受け取る。

「大丈夫ですか？聞くと、うちの子が無茶な真似をしたようで…」

「えっ、と…あの、あなたは…」

「私は蓮見世利那。孫悟空の保護者です」

「あ、はい、そうでしたか…僕は西光寺玄と言います。西の光る寺で西光寺」

この女、蓮見は孫少年の姉か何かだろうか、と玄が当たりを付けていると、丁度噂の本人が現れた。

「おー、目エ覚めたか。気分はどうだい、お師匠様（仮）」

例の鉄パイプを持った孫が、軽い調子で聞いてきた。括弧に仮が付くとはいえ、初対面の相手にお師匠様と呼ばれては何が何だかわからない。

「こら悟空、あれほど室内で如意棒を振り回すなど言っているでしょう！玄関に置いてきなさい！」

「へーい」

蓮見のお叱りを適当に聞き流しながら、孫は素直にリビングを出て行く。

本人がまた居なくなった所で、玄は一番気になっていた事を聞いてみる。

「あの…孫くん、ですか？変わった名前ですよね、孫悟空、何て。

あ、ハンドルネームとか…ですか？」

玄の質問に、蓮見はああ、と感嘆する。

「申し遅れました。私は俗世での名前を蓮見世利那、本名を観世音菩薩と言います」

「……は？」

「あちらは齊天大聖孫悟空。悟空は肉体の名を知らないのです、そのまま悟空と名乗っています」

玄の思考がフリーズするが、蓮見はどんどん話を進めてゆく。

「話せば長くなりますが、突如として天が消失したのが為、我々仏神は俗界の肉体を得て転生する事となったのです。本来俗界に流された者はその罪悪により記憶をなくし真実を見る目を失いますが、今度は罪を犯さずにやむを得ず下界に下ったので記憶と力を持っています」

「え、あ、う、でも……」

「そして、私達には各々探すべきものがあります。私は天が失われた理由を、そして悟空は……」

「我が師、玄奘三蔵。お前がそうなら俺が分かる筈だ」

鉄パイプを置いて戻ってきた悟空が会話に割って入った。

「もし、この俺が分からないってんなら赤の他人か……」

距離を詰めて、尋問の体勢を取る。悟空の深く澄んだ目が玄を捉える。人の手では決して造り出せない人外の色。家がそういう家だから話の概要は知っている。その昔、老君の炉に燻されて染まった瞳。「まだ、覚醒していないのか。二つに一つだ」

トン、と肩を軽く叩いて、悟空が離れる。そのままキッチンに入っ
て、冷蔵庫を明けて大粒の水蜜桃を取り出して、碌々皮も剥かずにかぶりついた。

「悟空、汁を床に零すんじゃないよ？……信じられない話でしょうが、事実なのです。でなければ、悟空のあの怪力は説明出来ないでしょうっ？」

「……………」

玄は嘘だ、という言葉を読み込んだ。何故ならばそれは悟空の目と蓮見、いや観音の言葉が真剣そのものだったからで、既に彼の心はこの異常な事態を受け止めようとしていた。

「……それで、一体僕はどうすれば良いんですか」

「何も。今のあなたは玄奘の生まれ変わりなのか、それともただの人間なのか判別が出来ません。もしも玄奘が転生したのがあなただとしたら……玄奘が目覚めると同時にあなたという人格は消え去る。」

それを忠告しておくだけです」

「そう、ですか……」

今もしも自分が消えてしまったとしたら、何か不都合はあるだろうか？あるだろう。寺の跡取りが居なくなる。しかし、寺を継ぐ気は、始めからない。至極当たり前の事実を目の当たりにするしかないのだ。誰が死のうと世界は不変だ。例えそれが自分自身であったとしても。けれど、突然何の前触れもなく消えてしまふのだとしたら

…

ドゴオオン！

まるで部屋に鉄球が突っ込んできたかのような音が、鼓膜を痺れさせた。

「おい猿！テメエよくも俺に押し付けて帰りやがったな！」

「あ、悪イ」

「ッざけんじゃねえよ！二十人もあんな雑魚殺さねえようにすんのなんざ面倒臭えんだよ！上手くいったから良いものの、下手したらあの電気屋の修理代俺持ちじゃねえか！」

街中で見た、悟空と共に居た赤毛の少年が怒り心頭といった様子で怒鳴るが。

「まあ許せよ賢弟。これにはな、ちよつとした事情があるんだ」

「ちよつとも何もあるかよ！このエテ公！チビで寸足らずの猿が！」

「あ、あん！？テメエ、この孫様に対して、事情も聞かずに結構な口を利いてくれるじゃねえか！身の程知らずのガキが！」

鬼の形相を浮かべた二人が即座に激しい殴り合いを始める。凡そ人体でのぶつかり合いとは思えぬような破壊音がひっきりなしに部屋を埋める。

あちらが腹を蹴ればこちらは顔に拳を食らわす。あちらが身をそら

してかわせば、こちらは軽々宙返り。悟空に限ればついでに顎を蹴る、といった具合だ。

「全く…師兄も師弟も愚兄愚弟で苦勞するよ。大体、大会登録なしで試合を始める何て…事後申請は面倒臭いっていうのに…」

ぶつぶつと愚痴を言いながらのろのろと歩いてやって来たのは、最新型のノートパソコンを手にした少年だった。全身黒尽くめで、猫背だからかよく分からないが、恐らくはかなり背が高い。

そしてまた、彼も喧嘩している二人に倣って、美形だった。すきつとした一重瞼の形良い右目の下にある、縦に二つ並んだ泣き黒子が印象的だ。先の二人程派手さはないが、雰囲気がある。流し目でもしたら落ちない女子は居ないだろう。

「あ」
黒尽くめの少年が、玄の姿を捉えるなり感情の見えない声を漏らした。

「？」
「そこ…多分巻き込まれる」
「え」

時既に遅し。壁に向かって吹っ飛ばされる赤毛の少年の爪先が玄の腕に掠ったせいで、袖がぐつしよりと濡れてしまった。

「ははは！この孫様に挑むたあ、万年早いぜ甥っ子よ！」

「テ、メエ…親戚面すんじゃないっ…」

食べかけの桃を片手に勝ち誇る悟空に対し、赤毛の少年が即座に立ち上がり鋭い蹴りを食らわせる。勝ったと見て油断していた悟空は顔から服へとべつちより桃で汚れ、僅かな間を置いてから再び腕を振り上げようと構えるが、

「や・め・な・さい？」

につこりと迫力満点の笑顔を浮かべた観音の言葉に、二人が凍り付いた。

「…西光寺さん、大丈夫ですか？」

「あ、は、はい…」

「そうですか。大事に至らなかつたようで何よりです。さあ、すっかり散らかってしまった部屋を片付けましょう。兄弟仲良く片付けるのですよ?」

「うへーい」

「…かしこまりました」

立ち上る怒りのオーラを察して、悟空は怠そうに、赤毛の少年はぎこちなく返事をした。黒尽くめの少年が呟く。

「自業自得…」

「兄弟仲良くと言ったでしょう?お前もやるのですよ」

どうやら観音は地獄耳らしい。ピシヤリと言い捨てて、反論を許さない。

「…俺あちよつくら、先に風呂にでも入ってくるかな」

「あー、硝子割れてるな。掃除機掃除機」

「全く…何やってるんだよ。このソファいくらすると思ってるの…」

「あ、あの一」

各々動き出した三人を見て、玄が恐る恐る質問する。先程からずっと気になっていた事だ。

「もしかして…悟空、って事は、あなた方は猪八戒と沙悟浄…?」

すると、三人は一齐に玄を見た後、一瞬の間を置いて、

「はああああ!?!」

「どこをどう見たら!?!」

悟空以外の二人が声を荒げる結果となった。さて悟空はといえば、腹を抱えて呼吸困難に陥っている。

「ぎゃはははははっ!ひっ、はっ、はははははは!」

「冗談じゃない…あの二人と間違えられる何て…ゾツとするね」

「笑ってんじゃねえぞ猿!」

普通、悟空を中心とした三人組といったら、悟空、八戒、悟浄の組み合わせしか思い付かないだろう。玄の発想はごく自然な推測と言える。

では、彼らの正体は一体何者なのか。そう尋ねる前に、二人は自ら

名乗りだした。

「いいか？よく聞け！俺はな…枯松澗火雲洞にあつては聖嬰大王。火炎山で三百年の修行を詰み火炎槍を操る。観世音菩薩に帰依しては善財童子。父の名は牛魔王、母の名は羅刹女。我が俗世での名は、紅孩児」

「…黒風山黒風洞に住まいては黒大王。後、観世音菩薩に帰依しては普陀落迦山守山神。俗世での名は黒熊怪」

所で、玄は考えている事が顔に出やすいたちである。案の定、二人の氏素性を耳にした玄は、どうしよう分らない…という顔をしていた。

見かねた悟空がくくくと笑いながら説明をする。

「こいつらはな、元は旅の途中でお師匠の袈裟を盗もうとしたり、お師匠を殺してかつ食らおうとした妖怪なんだ。しかしこいつらが特別なのは、互いに素手でやるとこの孫様とほぼ互角だつて事なんだ。それで、それぞれ俺が緊箍、黒熊怪が禁箍、紅孩児が金箍を付けられて観世音に帰依したつて訳だ。言うなれば俺の、もう一つの兄弟分よ」

「へえー…」

どうしよう主な活躍エピソードを聞いても分からない。特に黒熊怪…と、顔に書いてある玄を見かねてか、悟空はからからと笑いながら余計な一言を付け足す。

「ま！この孫様が高名過ぎるから、熊だの餓鬼だのが霞んで見えるのも無理はねえなあ！」

この一言に、紅孩児が怒らない訳がない。

「オレは別に…目立ちたくない…」

一人消極的な意見を述べる黒熊怪の横で第二ラウンドが始まるうとした、まさにその時

「…悟空、黒熊怪、紅孩児…私は皆で片付けると言つた筈ですが？」腕を組んだ観世音がアルカイツク・スマイルも美しく言い放つ。妖

怪三人は身を硬くしてよく聞く。

「P・D・Q! (Pretty Darn Quick!)」
速攻でやってね?とお言葉に、今度こそ三人は無言で各々作業に取り掛かる。何となく背中肌寒いものを感じた玄も、無言のまま片付けを手伝う。

桃の汁を洗い流しに行った悟空とソファの修理を電話予約する黒熊怪を尻目に、紅孩児と共にしゃがんで床の硝子を拾う。

「あ」

「切ったか?」

「うん、ちよつと洗ってくるよ」

奇妙な感覚だった。元来他人に対し警戒心の強い玄は、引き籠もりになるだけあって、相手がヤンキーやら優等生やらだと気後れしてしまう。特に、その中でも最も苦手とするのが玄の意識するスクール・カーストの最上位、つまりはクラス中の人気者というものなのだ。

しかし、明らかにそういった人種である筈の紅孩児と顔を突き合わせていても苦痛を感じないのは不思議だった。紅孩児だけではない。観世音も黒熊怪も、誰もが認める美形だろう。玄は何時もなら顔形の整った人間の傍には居たくないと思うのだが、ここではそれがなかった。

ただ、悟空だけが特別だった。

金に光るあの赤い目の深さが底知れない。余りにも澄んでいてまるで宝玉を溶かして流し込んだような瞳は確かに、もっとよく見たいと思わせるが、魅入るのが恐ろしいような気もする。そんな代物だった。

「あ、おい、西光寺、だっけか」

「こつちだよな?」

脱衣場の扉に手を掛けた玄は、紅孩児が場所の案内をしてくれようとしたのだと解釈して、微笑を浮かべた。

「いや、そっじゃなくて…」

ガチャリ。

ドアを明けると、湯気が一気に部屋へと流れ込んだ。

「おい、いきなりなんだ」

「ああ、ごめん。ちよつと硝子拾ってたら手を切つて……?」

風呂上がりの悟空の姿を上から下へと眺めて、玄は硬直した。

「そうかそうか、ちよつと待つてる。今着替えるからな」

ジャーンズジュニアもかくやという凜々しい顔に白い肩に背に、長く伸ばした黒髪が濡れて張り付いている。腕は長く足も長く、胸は僅かに肋が浮き、腹は薄い皮膚の下で筋肉が割れていた。

が、腹の下が問題だった。

「ええええええええええ!？」

ばたばたと走ってリビングに駆け込み、口をパクパクと開閉させて、脱衣場の方を指差す。

「言い忘れてただけだな、その猿……」

「ああ、そういえば……確かに初めて知った時は驚くね」

あくまで淡々と作業を続けながら、紅孩児に黒熊怪が軽く同意する。

「一体何をどこで間違えたのか、そいつだけ女に転生してんだよ」

絶句する玄の後ろから、ペタペタと廊下を歩いてくる音がする。

「おおい、お師匠様（仮）どうしたってんだよ、人を見るなり叫んだりして」

と、首にバスタオルを引っ掛け、黒いトランクス一丁の悟空がごしごし頭を拭きながらやって来た。こうしているとまるで少年だが、先程見てしまったものは夢ではない。紅孩児と黒熊怪の肯定こそが何よりの証拠で、玄は軽いパニックに陥った。

そもそも、あんなに胸のない少女が存在する事に驚くべきなのか、女の体を全く気にしていないのを驚くべきなのか、あっさりとこの

状況を受け止めているらしい紅孩児と黒熊怪の態度に驚くべきなのか…と考えたのだが、まるで的外れだった。ここは本来、あの斉天大聖孫悟空が女に転生している事それ自体に驚くべきだろう。

「うーん、もしやお師匠様の生まれ変わりかとも思ったが、どうも違うみたいだな」

呆れたように言う悟空に対し、紅孩児は、

「いや、この反応、確実に童貞だろ？何か要素としちゃ間違ってるねえんじゃねえか？」

紅孩児に続けて黒熊怪、

「ああ、確かに。昼間の試合の時といい、このトラブル巻き込まれ体質はかなり稀だね」

すると悟空、腕を頭の後ろで組んで、

「確かに。この筋力と体力と根性の無さがお師匠様っぽいんだがなあ…まあ、じっくり待つとするか」

にい、と笑った悟空と、女の子だと知ってから見るその際どいポーズに、玄は耐え切れず部屋を飛び出した。

高級マンションの非常階段をがむしゃらに駆け下り、逃げてゆく。

が、いかんせん、長い引き籠もり生活が祟ってか、遅い。

「うわ、走るの下っ手くそだな…おいエテ公、確かにアレ、玄装かもな」

「腕の振り方が破滅的だよな」

「だろ？」

広いベランダから、三人がそれぞれ好き勝手な事を呟いた。玄はいえば、転がるようにして非常階段から出ると、通行人とぶつかりそうになりながら駅とは反対方向へと走ってゆく。

「それに、ありや間違いない方向音痴だ」

さて、少女に転生した悟空が見付けた少年、西光寺玄は、本当に玄奘三蔵の生まれ変わりなのか。
答えは未だ闇の中である。

第四話「古書店街にて龍に逢う事」

今は空前絶後のストリート・ファイト・ブーム。

異種格闘技戦を更に野蛮に更に自由にそして手軽にした究極の娯楽格闘技。医学の飛躍的な進歩と環境、エネルギー問題の解決による精神的な飽食が生み出した時代の産物。退屈さで死にそうなる人間は皆、老いも若きも夢中になって闘技に見入る。有料配信される試合映像を集める。

ルールは簡単だ。

まず、そこかしこにあるバトル・ゾーンの中から一カ所好きなものを選ぶ。次に、対戦人数、対戦方法を選ぶ。そして戦う。それだけだ。

試合の記録を管理するのは世界で知らぬ者が居ない超巨大サイト“Anima”だ。ブームの火付け役にして、現在もストリート・ファイトの市場を一手に引き受けている。この“Anima”に登録すると、公式なファイターになれる。

身元は明らかでなくても登録出来るのがネットならではのところだろうか。人体にICチップを埋め込む何て真似は、プライバシー保護という名の人権によって不可能だ。

バトル・ゾーンは地面に四角く区切られたエリアで、通して番号が付いている。使用料は無料。その番号と個人のID、勝負方式の三つを“Anima”の試合登録画面に入力して初めて、それは正式なものとなる。

しかし、サイトに登録していない者でも、試合をする事が可能だ。だがしない者は殆ど居ない。何故なら、ファイトマネーが出るから

だ。

ファイターにはもれなくAからEの五段階でランクが付けられている。ファイトマネーの金額が変わるのは勿論、“Anima”は算出方法も特殊だ。まず、一試合につき、Aが四百円Bが三百円Cが二百円Dが百円Eが零円、となっていて、試合参加者のランクに応じた合計金額を頭数で割ったものが、試合の販売金額になる。その二割が勝者のものになり、敗者はびた一文たりとも貰えない。

試合は各バトル・ゾーンに設置されたビデオカメラによって録画され、有料配信される。試合の販売金額というのはそういう事だ。だから当然、参加するファイターに人気があればある程動く金額は大きい。

「…嘘だろ…？」

と、野蛮な路上格闘技に興味のなかった僕は、寺の事務職用オンボロノートパソコン（パクツてきた）の画面に向かって呟いた。勿論散らかりまくった部屋で。

画面の中には、昨日出会った長い黒髪に紅蓮の眼をした、美少年にしか見えない美少女が　　でかでかとしたAの文字と共に映っていた。

孫悟空

：

誰もが、初めて彼の存在を知った時には、何てふざけた名前で登録しているのだろう、と思っただろう。又はその余りの傲岸不遜さに呆れ返ったに違いない。最早相棒と言って良いだろう紅孩児についても同様だ。

だが、蓋を開けてみればどうだ？

軽快でありながら力強く、鮮やかな試合を見せてくれるではないか。ストリート・ファイトのファンで、彼を好きにならない者は居ない。

孫悟空の名は最早一種のブランドだ。絶対の価値が約束されている。本人の性格も良い。ノリが良く、試合前には勝利宣言を欠かさない。来る者は拒まず、去る者は追わず。かと思えば二対二の試合でコンビを組んでいる筈の紅孩児と乱闘に発展し、勝手にバトルロイヤルに変更：どこまでも面白い。ファンはそんなトラブルにも少なからず期待しているに違いない。(以下略)

* そういや昨日の悟空の試合って何だったの？何かギャラリー拉致って放棄してたよな？

* つか拉致ってww面白すぎるww

* 悟空に拉致られたい私が居ますが何か。

* 全力で拉致られたい。

* むしろ悟空拉致りたいww

* 死ぬ気か(^-^)

* 知り合いだったとしても悟空が試合放棄する何て相当だよな。生き別れの兄弟：はないか。

* 悟空が試合放棄とかがつかり

* 生き別れじゃないにしても身内なのは間違いないだろ。

* 紅孩児かわいそう

* 紅様苦勞人。しかしあのもさメガネ羨ましい。

* もさメガネwww

* 今から皆でもさメガネのメガネを砕きに行きましょう。

* おいメガネ：お前のそのポジション羨まし過ぎるだろ俺とかわれ。

* メガネ暗殺計画を本気で立てたい私が居る。

* つか、マジであるメガネ殺されそうじゃね？信者辺りに。

「……」

孫悟空、で検索して出てきた大量の関連サイトを見て、

「無理！」

考えるよりも先にそう叫んだ僕が居た。

「玄！何を騒いどるか！」

「いやそうじゃなくて無理！」

騒いでいるのを見咎めて、法事帰りの父親が怒鳴る。的外れな返事に、父親が首を傾げた。

「クリア！玄！意味不明な事言つとらんでさつさとパソコン返さんかあ！事務の山下さんが探しとつたぞ！」

「うっさい！今それ所じゃないんだよ！」

と、親子で煩く小競り合いをしていたら、思わぬ闖入者があった。ガラリ。

「よお、お師匠様（仮）朝から賑やかだな」

見慣れた部屋の見慣れた窓が勝手に開いて、見覚えのある顔がひよっこり現れた。因みに、僕の部屋の窓は崖に近い丘の丁度斜面に向いている。

「うわあああああ！」

「ギャアアアアア！」

「そんなに騒ぐなよ煩えなあ」

ひよいと散らかった部屋に降り立った悟空の存在は、土足のままというのを差し引いても、異質だった。散らかった部屋が似合わない。足場を確保しようとしてか、愛用の鉄パイプで床に溢れた物を掻き分けているが、余り意味を成していない。

「えっ、あ、何で僕の家……」

「あー何か今朝、観世音が……」

と、悟空が語り始める。

『ツクシヨー、お師匠様（仮）の居場所が分かんねえ』

『悟空…ではお前にこれを授けましょう』

『これは？』

『見ての通り、これは何の変哲もない携帯電話ですが、西光寺少年の居場所をGPSで教えてくれるとても便利な道具です。大切に使うのですよ？』

「っつて」

「何の変哲ない携帯電話な訳ないだろ！何時の間に僕の携帯のID登録したんだよ！」

ぞわっ、と背中に鳥肌が立った。昨日も何となく感じてはいたが、観世音は矢張りただ者ではないらしい。

「あー、何か昨夜、観世音が黒熊怪と一緒にこの携帯持ってパソコンに向かいながらクラックとかセキュリティがどうのとかって…」

「いいから！もういいから！聞きたくないって！」

携帯会社のメインシステムクラック出来るってどういう事だ。有り得ない。

「おい、んなことどうでも良いが、ありやお前の親父か？」

「え、あ、うん。そうだけど…」

しまった、父さんにどう説明しよう、と、思ったら…何だか父さんの様子がおかしい。

何時もなら、誰が相手だろうと土足で室内に入れば鼓膜が破れんばかりの勢いで怒鳴り付けるというのに、何故か変なポーズでべつたりと壁に張り付いている。よく見たら、顔は蒼白、足はガタガタと震えている。

「ん？」

悟空が眉を寄せ、ずんずんと大股で父さんとの距離を詰める。

「ヒイツ…！」

「んん〜？」

至近距離まで顔を見合わせて、ぱっと離れる。どつやら、これは悟

空が相手を観察する時の癖らしい。

「おい、こいつお前の親父じゃあねえぞ」

「へ？」

髭面の、いかにも生臭坊主です、といった父親の風貌は、全く僕に似ていない。唯一耳の形が似ていると言われた事がある位だけど、幾ら何でも実の父親じゃない、何て断言された事は…

「もっ、申し訳ございません！」

いきなり、父さんが跪いて土下座を始めた。降り積もった雑貨の山にぶつかるのに構わず即頭する。

「え？」

「大聖のお越しとはつゆ知らず、ご無礼を致しました！平にご容赦下さい！だから殴らないで！」

ヒイイイイ…と今にも死にそうな悲鳴を上げる父親の姿に、目が点になった。

「テメエ一体どこの土地神だ？正直に言わねえとぶん殴るぞ」

「お許し下さい！私は駱駝山周辺を担当していた土地神が転生したものです！五年程前に覚醒し今日までこうして寺の和尚となり生きてきました…」

ちよつと待つてくれ。話に付いていけない。僕一応当事者のような気がするんだけど。

「え、ちよつ…じゃあもしかして、僕の父さんって…」

「おう、間違いなく三年前に消滅してんな。ご愁傷さん」

「五年前です大聖…」

アッサリと言われてしまい、もうどうすれば良いのか分からない。展開が音速を超えている。

唯一の身内である父さんが何時の間にか消滅していた上に、中身が他人と入れ替わっていた？しかも五年前から？…何それ。

しかし、世間は決まって無情なもので、僕の理解スピードをガン無視して勝手に話は進んでゆく。

「ああん？つつう事は、だ。この孫様が覚醒したのが去年の年末…」

つまり約九ヶ月、テメエら土地神はこの俺に対して挨拶の一つもしに來なかつた訳だ？」

「申し訳ございません！私は反対したのですが、全土地神連合の会議で“大聖には見付からぬよう隠遁する事”と定められてしまったのです！」

「ほお、それを提案したのは何処のどいつだ？正直に言えばぶん殴るのは勘弁してやる」

ニヤア、と邪悪凶悪な笑みを浮かべた悟空の凄まじいオーラを目の当たりにして…悟った。

無理だもう諦めよう。と。これは僕の手には負えない。

幸か不幸か、西光寺玄という少年は人並み外れて諦めが良い人間だった。別名を根性無しと言う。

「おーい、どうしたんだよお師匠様（仮）」

「いや…もう、何か…色々と一杯一杯…」

あの後、父親 in 土地神から沈痛な面持ちで“生まれ変わって申し訳ありません”という重い一言を食らってしまった。

思わず現実逃避に走って悟空に連れられるまま、というか引きずられるまま…というか寧ろ荷物のように担がれ拉致られるまま知らない街に來てしまった。

「で、さ、あの…ここってどこ？」

見た所、古い街のようだが、綺麗に整っている。どこことなく、落ち着いた雰囲気がある。何処を写真にして切り撮っても画になるだろう。

「知らんねえのか。日本一有名な古書店街だぞ？」

「あ、うん、今聞いてわかった」

確かに先程から古本屋がそこかしこにあるのは目に入っていた。

ただど何だか、“Anima”のトップファイターにして確実に戦闘中毒だろウ悟空にこんな所に連れて来られるのは予想外だった。多分、観世音の家か、でなければもつと派手で賑やかな若者の街に連れて行かれると思っていた。

「…お前、来た事なかったのか？」

「え？いや、昔、小さかった頃何回か母さんに連れられて来た事はある、けど…」

そう、七歳で母さんが死ぬまでは、よく連れて来て貰っていた。何軒か母の馴染みの店を回って、喫茶店でシャーベットを食べて帰った。母さんは読書家で、葬儀が終わった後も蔵書を片付けるのに半年も掛かったのを覚えている。そして今、本が行儀良く並んでいた部屋は、安っぽい雑貨の山と埃で埋もれてる。

「そうか。じゃあ道は知ってたんだな？」

「少しだけね。今はもう変わってるかも知れないし…」

知っている場所だと思えば、臆気にだが道を思い出してきた。次のかどを右に曲がって、奥の細い道に入れば、母さんが一番鼻屑にしていた店がある。

「行ってえ店でもあんのか」

「いや…うん、そうだね。寄ってって良いかな？」

「おう。付き合うぜ」

気のせいだろうか。行きたい、と言ったら、悟空の目が僅か輝いた。意外に、読書が趣味だったりもするんだだろうか？

店に入って、本を物色しながら話す。

「本、読むの？」

「いや…普通は読まねえな。精々が実用書位のもんで、それも大概は人に聞いちまう」

「それは？」

「解んねえなら、いい」

悟空はそれだけ言うと、漢字が氾濫する本を閉じて、元あった棚へ

と戻した。その表紙に般若心経、と書いてあるのが見えて、ああ、失望させてしまったんだな、と思った。

「買うのか？」

「うん」

僕は二冊だけ流行遅れのベストセラーを買って、店を出た。悟空は何も買わなかった。そもそも、財布を持っているかどうかも怪しいので仕方ないだろう。

まだ暑い九月、平日の昼間は人影が少ない。

どうやら特にこれといった目的がある訳ではないらしく、ぶらぶらとダラダラと連れ立って歩く。

「ちよつと休憩しようよ」

「腹減ったしな」

耐えかねて、近くにあったレトロな喫茶店に入る。

僕は紅茶を、悟空はあんみつを頼んで食べた。

そういえば他人と出掛ける何て何年振りだろう、とあって、はたと気付いた。中身は猿とはいえ、よく考えてみれば悟空の体は女子だ。っていう事はつまり、即物的に捉えれば今正に僕は所謂デートというものをしてるんじゃないだろうか。初デートじゃないか。リア充じゃないか。いや待て落ち付け。落ち着くんだ。寧ろ何ナチュラルに喫茶店に入ってるんだ僕。端から見れば野郎二人で居るようにしか見えない。というか、悟空と僕とじゃそもそも見た目のスペックが根本から違くないか？オマケに社会的地位所か魂のステージまで違いそうだ。

と、今日もまたキャパオーバーを迎えそうになる。美味しそうにガツガツとあんみつを食べる悟空の顔が…実はそんなに男っぽくないのが分かった。造りは、紛れもない美形。確かに少しだけ釣り目だけど、鼻や額、長い睫毛に、顎の輪郭などには僅かだが少女らしい要素を備えている。

…尤も、有り余る漢らしさがその全てを無効化していたが。

残り半分を胃に流し込む姿に、一気に現実へと引き戻された。

「そういえば、お金とかがって…」
「ん」

悟空がポケットからズボンのチェーンに繋がれた定期入れを引っ張り出す。中には一枚のカードが収まっていた。コンビニだろうがファミレスだろうが、ありとあらゆる交通機関で使えるカード、の…
「世界共通モデル!? しかもゴールド!?」

「観世音がくれた」

「ほんとに何者!? あの人!」

泣く子も黙る最強の世界共通カード。これ一枚あれば、電気の来てる場所であればどんな施設でも買える物が可能っていう殆ど反則技が使える、本物のレアアイテム。確か世界にまだ千枚位しかないって聞いているけど…

「黒熊怪が言うには、俺ア金の管理が雑だから現金で買い物するのに向いてねえんだとよ。それにこれなら口座とセットになってるから、ファイトマネーの管理も済んで一石二鳥って訳だ」

「ちよっ、ちよっ、ちよっ…待って。あのさ…悟空って、口座とか分かるの?」

「ああ?分かるに決まってるだろうが。お前、俺を誰だと思ってやがる」

誰だと言われましても。だからこそ分からないんじゃないかと思っ
ている訳でして。

「大体生きていくのに必要な事なんざ、目覚めて一週間で頭に叩き込んだ。孫様のおつむに掛かりや楽なもんだぜ」

「…お見それしました」

意外にも神話世界の住人は、現代にあっさり順応しているらしい。結局、当初の心配と予想を裏切って、悟空に奢って貰う結果になった。何時もならここで、くそうリア充爆発しろ、とか考えるのに、何故か泣きたくなかった。どうしてだろう。悟空が猿だからだろうか。それとも悟空の体が(一応)女の子だからだろうか。わあ、僕にもまだプライドとかあったんだ…新発見だよははははは。

「おーい、お師匠様（仮）へばってんのか？熱中症か？」

「ちよつと精神的ダメージが…いや、やっぱり何でもない…」

「おおーい、倒れんなよ？背負って帰るのは俺なんだからよ。背中にゲロ吐かれちゃ堪んねえ」

びっくりして、思わず顔を上げる。

もし倒れたら、背負って帰ってくれるのか。

そんな僕の様子に構わず、悟空はぶらぶらと歩き出した。まるで江戸時代の水売りのように鉄パイプを首の裏に当てて両腕を絡ませている姿が妙に道化っていて、この空気にそぐわないのが面白かった。

暫く歩いて、やっぱり手足が長いと歩いているだけでサマになるよな、何て後ろから眺めていたら、悟空が歩調を落とした。

隣に歩くようになって、呟く。零す、と言った方が正しいかも知れない。

「…今、もしもお師匠様が居たとすりゃあ、絶対ここに来る筈だと思っただがな」

無表情な悟空の顔に、圧倒された。ただ一点を見据えている生き物の顔だ。矢張り、真紅の目には黄金色に光が拡散している。

横顔が、素晴らしく美しかった。いつそ怖い位に。人間が持ち得ないものを持った生き物が、人間と同じ形をしている。

「あ」

耐えられなくなって、声を出してから無理矢理話題を探す。車線の反対側、アスファルトの上にある正方形を口実にする。

「こつこつという街にも、バトル・ゾーンってあるんだね」

「あるに決まってるんだろ。ない土地の方が珍しいぜ」

すると丁度、バトル・ゾーンに入る人が居た。今から試合の予定でもあるのだろうか？それにしても、ギャラリーが一人も居ないのは、エントリーしたばかりの新人だからなのか、こつこつという街だからなのか…

見た目は筋骨隆々、素人とは思えない貫禄と体格だ。身長も多分、二メートル近くある。シンプルな白いTシャツにジーンズ、髪は少

し長めでゴワゴワしていて、毛先がライオンの鬣のように靡いている。

…あれ？ビミヨーにフラグの気配がするよ？

「そこな少年！」

「やっぱりフラグだよチクシヨウ！」

「待つてる。あの野郎生意気だからちよつくらシメてくらあ」

「アツサリ喧嘩買わないで！頼むから！寧ろ僕を巻き込まないでくれよほんとに！」

もう嫌だ。この突発性トラブル吸引体質。これ絶対あれだ。西遊記関係者だ。時代錯誤な口調からして間違いない。

「ヒス起こすなよお師匠様（仮）。この孫様が二秒で片付けてやっからよ」

と、ブンブン鉄パイプを振り回しながら意気揚々とバトル・ゾーンに向かう悟空を止める事すら出来ず、流されるまま後に付いて行くしかなかった。引き籠もりは押しに弱い繊細な生き物ですそつとしておきマシヨウ。

「餓鬼！貴様齊天大聖孫悟空と名乗っておるらしいな！若いながらにその豪胆さは買ってやろう！だがしかし、その傲岸不遜な」

「知ってるよなあ、オツサン。“Anima”の基本理念」

後ろからでは見えないが、分かる。今、悟空は確実に、例の凶悪な笑みを浮かべ、赤い瞳を黄金にきらつかせている。

今朝読んだ“Anima”の本ページに記載された言葉が脳裏に蘇る。

「テメエは今現在線の中に居る。だが俺は今外だ。そして、」

一歩一歩悠々と。きつと死刑執行人が壇上に登るのはこんな感じだ。

「バトル・ゾーンの中は戦場だ」

白線の内に足を踏み込んだ途端、跳躍。一気に距離を詰める。だが相手もただではやられない。宙にいる悟空を、右手に持った自らの獲物である黒い木刀で叩き落とそうとする。だが、その時、悟空は両手で持った鉄パイプの左端を使って弾き回転に任せて腰を捻り、

右端で相手の首の付け根を打った。男の巨体が膝から崩れ落ちる。花びらが落ちるかのような軽やかな着地。

「チツ…んだよ、齒応えねえなあ…」

世界一有名なサイト、が掲げる理念を、僕は肌で理解した。僕は絶対・一生・何があっても、あんな場所には入らない。

「うつ…」

「あ、気が付きましたか？」

がはっ、と男がバネ仕掛けのオモチャのように起き上がった。

「こ、ここは…」

「暑かったんで、近くの喫茶店に移動させて貰いました。すみません…」

激しく首を左右に動かして辺りを確認する男の様子に、常連と思われる喫茶店の客や店主がクスクスと笑っている。

「そっ、そっだ！大聖っ…！」

「喚くな雑魚。煩えんだよ」

カウンター席に足を組んで座った悟空が、じるじるとストローでブラックのアイスコーヒを啜りながら気怠そうな様子で言う。

「大聖ッ！」

男が素早く起き上がり、悟空の元に走り寄る。

再戦を挑むのか、と思いきや、

「申し訳ございません！某、凡胎俗眼の哀しさから、大聖ご本人とは分ならず…この敖廣、一生の失態！如何様にもご裁断を！」

男は膝き頭を垂れた。放っておけば、悟空の靴の裏に頭を擦り付けそうな勢いだ。

「良い心構えだ敖廣。テメエのその物分かりは嫌いじゃねえ。だが…この俺様を見抜けねえなあ、どういう了見だ？」

ガツ、痛そうなお音がして、悟空が敖廣と名乗る男の頭を思いつ切り踏み付けたのが分かった。

「ちよっ…悟空…！」

「構うな少年！これは自らの愚かさが招いた事！介入する事は許さ…んんっ！？」

グリグリと踏まれるままになっていた男がいきなり立ち上がり、油断していた悟空が椅子から落ちてひっくり返る。

「この感触！貴様矢張り大聖ではないな！大聖の蹴りはもっと」

ゴツ。

「黙れつつつてんだろっが」

表出る、と悟空が敖廣の襟首を掴んで引き摺ってゆく。コーヒーの支払いは僕がしておいた。

「ハッ！しかし今の拳！あの威力は確かに大聖のもの…しかし足の感触は…」

引きずられながらぐるぐると思考の坩堝に嵌っているらしい敖廣さんを適当な路地裏に蹴り入れて、悟空が腕組みをし、仁王立ちのポーズを取る。

「面倒臭えから単刀直入に言うぞ。俺ア女の体に転生しちまってるんだ」

敖廣さんの表情が固まり、動きが止まる。

絶句。

ああ、うん、やっぱりそうだよ。悟空が女の子だって聞いて驚かない訳がないし…

「な、何と、それはまた…」

がつくりと敖廣が姿勢を崩す。先程までの言動からして、悟空を尊敬しているのは間違いない。漢らしい悟空が女に転生したのがそんなにショックだったのか。

「まあ、罪を犯して下界に転生した訳ではないから俺の神威はさし

て変わらんのだが…」

「…大聖、大変言い辛い事ではありますが、某、恥ずかしながら下凡して己を知りまして」

「唐突だな。まあ良い聞いてやろう」

「この肉体、すぐ側にある古書店の主のものでして。目覚めた時も店に居たものですから、状況を把握するなり、直ぐ手元にあった書物に目を通して…以前からあった疑問とその感覚が形を持ち、頭にあつた霧が晴れるような気が致しました」

「あれ？どうしてだろう。また嫌な予感がする。いや…違う。これは嫌な予感じゃない。もつとずつと忌まわしいような…そう、悪寒、だ。」

「常日頃から大聖に暴行を加えられまるで犬畜生の如くこき使われる際に感じる、あの感覚…我は理解せり！美少年からの被虐による快樂こそが至上の悦びであると！」

ぶわあ、と全身に鳥肌が立った。まさかこんな所で本物の変態に遭遇するとは思つてなかった。

鼻血を流しながら爛々と目を光らせる男前に、流石の悟空も全身に鳥肌を立てて硬直している。何時も良い顔色は蒼白。生理的に無理だ、と書いてある。

「キ」

わなわなと悟空の体が震える。多分本能的な恐怖からだ。かく言う僕も（幸いにも美少年ではないから）対象外だというのに、今直ぐにでも逃げ出したい気持ちで一杯だ。

「キツ」

「しかあぁあし！大聖であれば例え少女の肉体であろうともこの敖廣、本望です！大聖だけは別格です！さあ、何なりとお申し付けを…」

「キシヨイんだよテムエエエ！！」

鉄パイプが炸裂した。脳天に。

数秒だけ荒い息を整えると、悟空はまだ青い顔のままくると振り

向いて歩き出した。

「… 帰るぞ」

「うん、そうだね…」

敖廣さんの頭蓋骨の状態は確認しなかった。少なくともザクロにはなっていないかったし、それに…確認したら恍惚の笑みを浮かべていそう、怖かったからだ。

帰りは悟空と二人で電車に乗った。ずっと無言だった。手を振って別れた。こういう日は早く寝て全部忘れるに限ると思う。

この日は久々にグツスリと眠れた。

【豆知識】

東海龍王敖廣は孫悟空に如意棒を授けた龍。何かといえは悟空にパシられている。因みに、三蔵法師の馬になったのは玉龍であり、敖廣ではない。

付録・紅孩児スレ

- * そういやスーパーで紅孩児見たって言うってたぞ。知り合いが。
- * マジか。そこんどこkws k
- * 有名だよ？
- * スーパーでタイムセールに参加王子。
- * 紅様は王子なのに庶民派ww
- * よく悟空と口喧嘩で台詞かんじゃうよ王子ww
- * 滑舌悪い訳じゃないんだけどなあ
- * それが紅様クオリティ。
- * いいこと言った
- * 今日のタイムセール：りゅ
- * カッコかわいらしい
- * 記憶から鮮やかに蘇るハタキエプロン伝説
- * リアルタイムで目撃した俺が居ますが何か
- * 尻ポケットにハタキ：
- * つかあの伝説はマジだったのか：じゃあエプロンにアップリケ付いてたつていうのも真実か：
- * いやそっちはデマ。でも尻ポケットにハタキはほんと。
- * ハタキになりたいです王子（、、）
- * いや寧ろ私は雑巾でもいける。
- * 悟空に振り回される紅様が愛おしい。
- * 紅孩児のファンクラブが本人公認って本当？
- * デマ。紅孩児がファンの女に押し負けて曖昧な返事したからそう言うてるだけ。

* つか悟空のファンクラブってないの？紅孩児だけ？
* 最早ファンクラブ作るとか人数多過ぎて無理な気が…
* まあもちつけ。我々は我々で、気ままな悟空様に振り回される紅様を讚えていこうじゃないか。ひっそりとな。

「……んだよ、こりゃ」

黒熊怪が突き出してきたノートパソコンの液晶画面に向かって呟いた。

横に立つ観世音がアルカイック・スマイルで微笑んでいる。

「勿論、あなたのスレッドです。よく分かったでしょう？私が常日頃“エプロンのまま買い物に行くな”と言っている理由が」

「…つか何なんだよ、このエテ公との差。おかしいだろ」

「あ、着目するのそこなんだ」

「紅孩児、普通はハタキ事件を目撃されていたという事を恥じるものですよ…」

第五話「娯楽街にて魔王と闘う事」

西光寺玄は、最早引き籠もりを廃業していた。

否、寧ろ今はもう家出少年になりそうな勢いだった。なりたいたすらぼんやり考えた。

だが、元来家所か自分の殻にすら籠もりがちな玄少年が野宿という大変原始的且つ無謀な手段に出る事はなかった。ただ家出したい、という思いが転がっているだけで、実行する気などさらさらないのだ。

しかし立て続けに現れる問題の山は如何ともし難い。孫悟空の生まれ変わりが現れたり、その関係で自分の父親が実は父親ではなく自身が土地神だったと判明したり…とそういうものだ。そも原因は一体何であるのか。この無情な状況の正体は一体何なのか。そして彼は結論に至った。

“西遊記読もう”と。

読書は嫌いじゃない。

だから約二日掛けて、蔵から発掘した西遊記の完訳版を読破した。そしてすぐさま深い溜め息を吐き、泣きそうになった。予想していたよりも遙かに登場人物が多かったからだ。これから登場人物の数と同じだけトラブルに見舞われるような気がしたからだ。不思議な事に、こういう予感の外れない。それが世界の法則であり常識だ。

そこに来て、携帯電話がわざとらしい電子音を立てた。誰かから携帯に電話が掛かってくる事など久しくなかったので、数十秒もたつてから取る。

『おー、お師匠様（仮）、今からメシ食いに来ねえか？』

「うん、今行くよ」

素直に応じると、すぐ電話は切れた。僅かに時間を置いて、地図が添付されたメールが届く。最寄り駅の名前を確認すると、適当なシヤツを着て家を出た。

人間というのは不思議なもので、つい先日まで一人にしておいてくれと思っただけでも、天涯孤独の身の上になってしまえば、誰かに寄り添いたくなるものらしい。

父親と同じ顔をした他人と同じ食卓に着きたくなかったのもある。

家の距離は二駅と、案外近い。その最寄り駅から十分程歩くと、先日拉致された先である高級マンションが見えた。

「おー、来たか。案外早かったな」

エントランスに入ると、丁度サンダルを突っ掛けた悟空が出てきた。今日は綿の、黒いミリタリー風の七分丈ズボンに、同じく黒い、バックプリントと縁取りが赤いタンクトップを着ている。

紛れもない少女の肉体の筈だが、どう考えても下着を着けていない。更に、よくよく見てみれば、実戦で鍛え上げられた二の腕は白くはあるものの、うっすらと筋が浮いている。うわ、何だろこの敗北感…

「丁度出来る頃合いだぜ？」

踵を返して案内しようとする悟空の後に付いて、エレベーターに乗る。と、ふと思った。

あのメンバーで一体誰がご飯を作っていて、一体何が出てくるんだろ…？

悟空は除外するとしても、元が飲食の必要がない菩薩だったり…まともな人間の食事が出てくるとは到底思えない。普通に何かの目玉的なものが出てきそうで怖い。よしんばゲテモノでなかったとして

も味には大いに不安がありそうだ。

「たでーまー」

「お、お邪魔します…」

「いらっしやい西光寺さん。お帰り悟空。早かったですね。あと少し掛かりますよ」

部屋に入ると、観世音がにっこりと笑って出迎えてくれた。奥のテーブルでは黒熊怪がお櫃から茶碗に炊きたてのご飯を盛り付けている。

箸は既に人数分きちんと用意されていて、他にはまだ茹でた枝豆を山のように乗せた筈があるだけだ。

ん？待てよ？

「あの、紅孩児、さんは…」

「ん」

早くも枝豆で口の中を一杯にした悟空が、壁で仕切られた向こうを指す。確かあそこは僕の記憶が正しければキッチンだったような気が…

すると、突然物騒な雄叫びが部屋中に響いた。

「ッ…だらアアアア！ウラア！クラア！このっ…クソがあ！死にさせエエエ！」

「一体何が起きてるんですか!？」

「ああ、大丈夫です。心配ありませんよ。何時もの事ですから」「何時も!？」

物凄い勢いで何かを刻む音と何かを揚げる音と何かを炒める音、は、良いとして、物騒な感じの金属音がするのは何でだろう？正直もう帰りたい。

ピタ。唐突に静かになり、一拍置いてからエプロンを着けた紅孩児さんが皿を大量に乗せたお盆を持って出てきた。いきなり静かになっっているのがまた怖い。

「で、紅、今日のメニューは？」

「茄子とエリンギの味噌炒め、冬瓜スープ、餡掛け豆腐ハンバーグ、

胡瓜と若芽の酢の物、パプリカとトマトのサラダ」

ごく普通に受け答えしてる黒熊怪…さんと紅孩児さんに衝撃を受ける間もなく、すぐに皆席に着いてしまった。え、ちよっ、なにこれ。流れに従って席に着く。所謂お誕生日席は観世音、右に悟空と紅孩児、左に僕と黒熊怪となった。

「…紅は何時もキレイながら料理するんだよ…理由は知らないけど」
「そ、そうなんですか」

見かねた黒熊怪さんが補足してくれた。これは予め聞いていないと心臓に悪い。絶対。

「違えよ。気合い入れてんだよ気合い。って、おいエテ公。だから先に食うなっつってんだろ。しかもサラダ独占してんじゃねえよ馬鹿」

サラダボウルを手前に引き寄せて、ドレッシングも掛けずにガツガツと生野菜を貪る悟空の姿は…紛うかたなき猿だった。矢張り炒めものより生野菜が好きらしい。

「悟空、行儀が悪いですよ？きちんとなさい」

「はいゴメンナサイ」

観世音が白衣の内ポケットから何かのリモコンらしきものを取り出した途端、悟空がサラダボウルを手放した。姿勢まで正して座り直している。おまけに、何故か注意された悟空以外の二人も姿勢良く席に座ったまま硬直している。何だろうこの緊張感。

「あの、そのリモコンって…」

「押してみますか？」

「だあああ止めるッ！」

差し出されたりモコンには、一番上にツマミが付いていて、下には縦に三つのボタンが等間隔に並んでいる。

リモコンを受け取った手首を妖怪三人がビーチフラッグもかくやという勢いで掴み、漸くこれが重要アイテムであると理解する。

「あの、これって一体…」

「ふふふ…これは“パパッとお手軽、デジタル緊箍”です。私が開

発しました」

ぱっ。と観世音がリモコンを取り返して微笑む。

「例えばこうやって押すと…」

「おい、ちよっと待…止め…っ!」

カチツ。

ボタンを押す音が耳に届き、そして、

「痛いっ!痛いいい!止めて!止めて下さいよおおお!」

「いぎああああああ!」

「いだっ、痛い!いてええええよおおお!」

三人が三人、頭を抱えて椅子から床に転げ落ちた。黒熊怪は俯せになつてビクンビクンと不穏な痙攣をしているので分からないが、悟空と紅孩児は目を見開き涙さえ流している。だが、紅孩児の方が痛みに弱いらしい。目が半分あの世に行つてしまっている。

「こつなる訳です。便利でしょう?」

「便利でしょう、じゃねえよ!殺す気かこのババア!」

「誰がババアですって?」

「うぐあああああ!ごめっ…ごめんなさい!いい!!」

暴言を吐いた紅孩児だけがまた床でのた打ち回る。正に断末魔の悲鳴、阿鼻叫喚の地獄絵図といった所。

「馬あー鹿」

「紅つて何時も墓穴だよね…」

あー痛い。そうぼやきながら黒熊怪が起き上がる。だが悟空は、少し涙目になつているだけで、キツめの頭痛位のようにだ。

「ふむ…矢張り末っ子は痛みに弱いですね。紅孩児、鍛え方が足りませんよ。悟空を見習つて精進なさい」

「脳の神経に直で電流流されて泣き叫ばない方がどうかしてんだろ

うが！」

「え、脳に直接って…」

マジですか。いや、冗談だよな？冗談であって欲しい。

「あれは…確かにな…」

「思い出すのもおぞましいよ…」

悟空が口籠もり、黒熊怪が重々しい口調で彼らの身に起きた事を語り始めた。

その時、僕は目覚めたばかりで、この時代に適応するのに精一杯だった。

そもそも使用言語からして違うから、基本的には家に籠もって日本語学習だった。幸い、この体の持ち主は一人暮らしだったからまだマシだったんだけどね…

Bannon!

『黒熊怪ですね？』

でもそんなある日…観世音様が僕の住むアパートのドアを蹴破ってやって来たんだ。

「ちよっ…！いきなり見破られたんですか!？」

「ああ…何故か予め知っていらしたようですね…」

そして僕はボディーブローを食らって気絶。目覚めた時には…手術台の上だった。

『あらあら、目が覚めてしまったのですね？仕方ありません。麻酔をしましょう』

『かつ、観世音様、一体何を…』

チュイイイイン!

『大丈夫です。少し頭蓋骨に穴を開けるだけの手術ですから』

「そして…次に目が覚めた時には…既にあのリモコンに全ての命運

を握られた後だっただ…」

「おうよ。俺も似たようなもんだ。バトル中にクロロホルム嗅がされて拉致られて手術台だ」

「悟空より前に来た紅も似たようなものだったよ。まあ、紅は生意気だから、って局部麻酔でやられてたけど」

背筋が冷たくなるっていうのはこの事だと思う。どうやら僕は、本格的な裏社会に片足を突っ込んでしまったらしい。色白な観世音さんのアルカイトクなスマイルが真っ黒に見える。寧ろゴツドフアーザー的な要素が垣間見える。

「さ、皆さん、紅孩児も大人しくなつたようですし、頂きましようか」

「はい」

「頂きます」

「うん、二人とも良いお返事ですね」

一人床に横たわる紅孩児さんを尻目に、食事が始まってしまった。僕は情けない事にその流れに逆らえなくて、彼を見捨てる結果になった。

「い…頂きます」

テーブルに並んだ料理はどれも絶品で、野菜だけだというのに食べ応えがあつた。これなら直ぐにお腹が減る事はなさそうだ。

こんなに計算され尽くした献立、洗練された味の料理を作り出した張本人が食卓から廃除されるという世の無情を噛み締めながらも、僕は思った。

…何このシュールな食事風景。

食事が終わってから、街に行く事になった。

どうやら街をぶらつくのが彼らの日常生活の一部らしく、ごく自然

に外出の準備をしているものだから、何となく行き先を聞きそびれたまま付いてきてしまった。

黒熊怪さんは凝ったデザインの黒尽くめの衣装に銀色のノートパソコンを片手に持ち、紅孩児さんは無地の白いＴシャツにライダース風のベスト。ダメージジーンズが良く似合っている　と、いう所まではよく分かるんだけど…問題は悟空だった。

「これ、却って動き辛くねえか？」

「良いから着ておきなさい。きつと役に立ちますから」

問題は、悟空の服装だった。

ポケットが前後左右に計四つ付いたミリタリー風のハーフパンツに、黒いＴシャツの上から着た、パンツと揃いのデザインのベストと、ブーツ風なスニーカー。何れも黒をベースに差し色に赤が入っている。

…と、要はカツコイイのだ。物凄く。ティーンズ向けのファッション誌に載っていてもおかしくない位だ。今すぐ　ヤニーズジュニアに入れる。…女子だけだ。

「えー、それ、したくねんですけどね、暑いし」

「良いからしておきなさい」

嫌がる悟空の手に、観世音がルーズな黒いアームカバーを付けさせれば、もう完璧だった。

な、何か…ゴツい服ばかり揃えてるせいかな、逆に悟空が女子っぽく見える？ってどうか…

可愛い、かも知れない。

「良いですか？今日も暑いですからこまめに水分補給をして、一時間に一個はこの熱中飴を食べるのですよ？」

「へいへい、分かりましたよ」

「悟空、お前がスポーツドリンク嫌いでなければこんな事を言う必要もないのだがね」

ポケットに飴玉やティッシュを詰め込む観世音に対し、悟空は子供のように口を尖らせている。

まるで仲の良い姉妹か何かのようだが、悟空の中身は紛れもない男な訳で。

「あの、観世音さん、悟空の服装って…」

ばたばたと鉄パイプを取りに玄関へと向かった悟空の姿を確認してから、生き菩薩様は微笑んだ。

「あの方が、可愛らしいでしょう?」

今日僕は菩薩様でも鼻屑というものをするのだと初めて知った。

さて、準備を終えてから、数十年に渡って若者の街、という称号を確固たるものにしていく場所に到着してみると、成る程、三人は凄く嵌っていた。

ストリートファイトのメツカたるこの街では、A級ファイターは英雄だ。あっちを見てもこっちを見ても、如何にもそれっぽい人間が居る。正に群雄割拠。

そんな敵つい戦士達が皆、どよめきを以て悟空を始めとした三人を注視する。派手なメイクをしたギャルや、可愛い女子高生が黄色い悲鳴を上げて携帯のカメラを構える。

「おい、お師匠様(仮)ちゃんと付いてきてるか?」

愛嬌が満載の動きで悟空が振り向いて声をかけてくる。駅からかれこれ五回目。因みに、まだ僅か数百メートルしか進んでいない。

「おい猿、一々立ち止まってんじゃねえよ!なあ西光寺、お前からも言っつてやれよ」

苛ついた紅孩児さんもこっちを振り向く。

「大丈夫だよ…もしはぐれてもGPSあるし…」

と、僕の隣を歩く黒熊怪さんがノートパソコンのキーをリズムカルにタイプしながら補足する。

「おい、何だあのメガネ」

「悟空に師匠とか呼ばれてんぞ」

「もしかして実はただ者じゃないってカンジ？」

「つか、Tシャツヨレツてね？」

ヒソヒソと揣摩憶測が飛び交うのが嫌が応にでも耳に入ってくる。

うわ、何か今凄く可愛い感じな声の女子にキモイって言われたような気がする。いやでもこれはきつと幻聴だ自意識過剰だ何かもういいです許してもう帰りたい。

…と、いう訳で、

「居心地悪…」

超絶居心地が悪い。何かもう吐きそう。ストレスで。

「大丈夫か？顔色悪イぞ。吐くんなら思い切って吐いちまえ。おい、便所行くか」

「いや…大丈夫。何でもない」

原因である張本人が心配そうに顔を近付けてくる。いやすいません。あなたが他ならぬ原因なんです。

ますますもって注がれる嫉妬と疑惑混じりの声に、神経が削り取られているような気がする。僕と悟空がゴチャゴチャやっている間に、黒熊怪が手を止め立ち止まる。

「あ、カモ発見。A級ファイター。一人で活動中」

「何処だ？」

「この先八百メートル。ああ、あっちも気付いた。近付いてくる」

「昇格は…三ヶ月前か。一番面白い時期だな」

紅孩児と黒熊怪が道を確認する。

“AniMa”には、自分のコードと居場所を入力すれば、近くに居るファイターを表示してくれる。だが、教える情報は色別に表示されるランクと、そのランクになってからの経過時間だけだ。相手の顔や名前は分からない。

「それっぽい奴を探そう。僕は相手にコンタクトを取ってみる」

「って…そんな事出来るの!？」

「出来る」

ああそうだったそうでした。この人、携帯会社のメインシステムをクラック出来る人でした。

「いよつし！バトルだ！久々のAランクたあ腕が鳴るなあ、おい！」
「騒いでねえで探せよエテ公！話はそれからだ！」

心底楽しそうに、獲物を見つけた虎か獅子のように凶暴な笑みさえ浮かべて、二人が雑踏の中へと駆け出してゆく。黒熊怪もぶつぶつと愚痴を言いながら、ゆつくりと歩いてそれに続く。

取り残された僕は、少し迷った。確実に、僕はこの場に必要ない。

この街は戦場が氾濫している。蛮勇達の街。闘う者が英雄で、それ以外は道に転がる空き缶位しか価値がない。証拠に、痛い程注がれていた視線がもう微塵も感じられない。

「……」

生唾を飲み込んで、足を踏み出した。考える前に動き出していた。

弾丸のように駆けていった悟空の姿を探す。拡散する金の光を宿した太陽の瞳。

気付いたら、走り出していた。長く走っていなかったから、足が縛れる。人が多過ぎて上手く進めない。

「っ、あ…」

「おっと、悪いな、兄ちゃん」

筋骨隆々といった感じの、大柄な男と肩がぶつかってしまった。本当に大柄で、もしかしたら先日会った劫廣よりも堂々たる体躯をしているかも知れない。白いタンクトップと、紺色のニツカポツカを履いて、頭にはタオルを巻いている。紅孩児のような華やかさこそないが、精悍な顔をしていた。玄とはまた違った原因から、この街に似合わない。

感じの良い人だな。

「ん？あれ？」

今のつて、もしかして…

はたと気付いて、追い掛ける。俄かに人口密度が高くなる。重い機材を担いだラフな服装の人々が走って人を突き飛ばして進んでゆく。「ちよつ、ごめんなさい…通して下さい！」

人垣にムリヤリ体をねじ込んで、バトル・ゾーンの前に転がり出る。「痛たたた…」

文字通りべちよ、と地べたに這い蹲るようになって、鼻の頭を少し擦りむいたのを触って確認しながら、顔を上げる。

向かって左側の辺には悟空、右側には、先程ぶつかった…ニツカポツカを穿いた男性が居た。

悟空の後ろには、不満そうな顔をした紅孩児と、細いメタルフレームの眼鏡を掛け、パソコンに向かいながら、取材陣との応対をする黒熊怪が控えている。

当の悟空はやる気満々、目を輝かせて、鉄パイプをブンブン振り回していた。

《試合開始は十四時三十分丁度。現在時刻は十四時二十九分四十六秒。カウント。…拾、玖、捌、漆、陸、伍、肆、参、弐、壹、》
バトルファンが何処からか持ち込んだコンポにインカムを接続したらしい。黒熊怪の声が拡大されて空気を割る。

《零》

試合開始の放送は、割れんばかりの歓声によって掻き消された。

四角く区切られた線の中に、二人が放たれる。無味乾燥な闘技場の中に。

「いつ、くつ、ぜええええええ！」

「来い！」

鉄パイプを振りかざし、脳天を砕こうと躍り掛かる悟空の攻撃を、男が持っていた武器で正面から受け止めた。

男の獲物は巨大な金棒で、表面には幾つもの棘が付いている。質感からして、恐らくは鉄。流石に使い込まれた感があつて地獄の鬼から奪ってきたと言われても信じてしまいそうだ。

鳴り響く金属音に、観客が湧く。

“あの”悟空の一撃を真つ向から受け止め、巨大な武器を軽々と振り回したのだ。ただ者ではない。

「うおおお止めた！誰だあのオッサン！？」

「知らねーのか？キヤマだよ、キヤマ！」

隣に居た青年二人が話している。いかにもなストリートファッションの不良っぽい相手だったが、思わず聞き返してしまった。

「キヤマ？」

「そう、近頃話題の黄山工業所属の職員！間違いなくトップクラスの社会人ファイター！」

「あー！話題の！“武器作るなら黄山工業”の！」

ノリの良い青年二人が説明してくれたお陰でやっと分かった。

黄山工業は、ここ数年で伸びてきた中小企業だ。確か元の名前が黄山製鉄で、戦後からずっと、細々と生き残ってきた会社だ。しかしストリート・ファイトの爆発的な流行と共に名称を黄山工業に改名。長年のノウハウを活かし、安価で質の良い武器をオーダーメイドで作っている。少々、いやかなり古臭い作りのCMで使われている“武器作るなら黄山工業”のキャッチフレーズはまだ記憶に新しい。成る程、自社製品のアピールも兼ねて参加しているのか。

ガン！

派手な衝突に、また観客が湧く。場が熱狂してゆく。人垣で出来た闘技場だ。

見ると、今度は逆に、キヤマが金棒で悟空の脳天を砕きに掛かっていた。しかし、悟空の方が速い。鉄パイプを使って受け流し、軽業師のように体を曲げ反動を付けて、キヤマの肩に蹴りを入れる。が、しかしキヤマに大して怯んだ様子はない。それ所か、不適に笑ってすらいる。穏やかな表情だったが、目だけはギラギラと獣のように光っていた。

「おい、テメエ、この孫様の蹴りを受けて倒れねえとはなかなかのもんだ。名前を聞いておこうか」

「待て待て！お前、俺が誰だか分からねえとは言わせねえぞ？」

「はっ！どうだかな！」

いよいよ悟空が笑みを堪えられなくなった、という風情で、悪戯好きの子供がするように相貌を崩す。殺す気で闘っても良い相手に出会って、歓喜に因って全身の隅々まで魂が行き渡るのが、見てわかる。明らかに興奮、していた。

そうだ、普通に考えて、悟空の一撃を受け止められるのは、ただの人間の筈がないじゃないか。

「俺は黄山工業広報課の横山黄一郎よこやまきいちろう！又の名を、黄眉大王！」

「…テメエのような馬鹿を待つてたぜえ！」

叫ぶなり、一瞬で間合いを詰めて悟空が懐へと潜り込む。鉄パイプの先で下から顎を砕こうとするが、咄嗟にキヤマ、いや黄眉大王は空いた片手でパイプの端を掴み、そのまま素早く悟空ごと地面へと叩き付ける。

額から突っ込むようにして落とされた悟空は素早く起き上がるが、体勢を立て直すのが一步遅かった。隙を逃さず、金棒がその小さな頭を襲った。

「悟空！」

考えるよりも先に、周囲に居る誰よりも大きな声で叫んでいた。高々と振り上げられた鉄の塊が振り下ろされ、悟空の体が一瞬、打たれた杭のように沈んで、その足場からアスファルトが砕け土埃が舞う。

反射的に目を閉じる。開ける。

「…投胎しても、神威はそのままか…！」

黄眉が驚きと畏怖を滲ませながら吐き出した。

悟空は、金棒を真つ向から受け、頭で止めていた。闘いの興奮に当てられた真つ赤な瞳に、牙を剥く凶悪な口元は、獲物を狩る歓びを追おうと歪に吊り上がっている。頭皮が裂けたのか、生命の証である鮮血が止め処なく流れ、その顔を更に壮絶なものにしていた。

「…生憎と、俺あ石頭が売りなもんでなあ」

金棒を受けたまま、ゆっくりと立ち上がる。ミシミシと、骨の軋む音が聞こえるような気さえした。

「おい黄眉、一度テメエとはきつちり決着付けてやろうと思った所だ。やってやろうじゃねえか！ああ！？」
血を撒き散らしながら、吼える。

黄眉大王は、元は弥勒菩薩の弟子であり、菩薩の留守中に袋を盗んで、下界に下ったものだ。仏像に化けて三蔵を騙し、八戒と悟浄諸共捕まえて食おうとした魔物で、結構な強敵だった筈だ。

「臨む所だ！名を上げるのに、孫、お前なら不足はない！」

「ハッ！そいつぁ光栄だぜ！」

ガッ。

手で頭を潰そうとする金棒を掴み、左へと力尽くで押しつける。

ゴッ！

鈍い音と共に、黄眉の頭がガクンと上を向いた。いかにも頑丈そうな唇から、唾液混じりの血が流れている。例の石頭で、頭突きを食らったのだ。

「このっ…良い気になるなよ、小僧！」

「おいおい、そっちこそ耄碌したんじゃあねえだろうな！俺様の方が年上なのを忘れたか！？」

仇敵に出会った喜びと怒りが、瞳の中で煌々と燃えている。

ガン！ギイン！ガッ！ゴッ！

今時のCGを使ったアクション映画でも見ないような、正に壮絶な打ち合い。上下左右、縦横無尽に鉄の筒と金棒が交錯し、衝突する。特に強くぶつかった時などは、火打ち石のように僅か火の粉が散った。加速に加速を重ねる。目で追うのがやっとだ。

「はははは！おい、楽しいなあ三下魔王！あともう少しでテメエの頭を砕けるかと思うとゾクゾクするぜ！」

ふと、温い風が微かに吹いて、酸化し始めた血の臭いが鼻に届いた。そして思い出す。これは武芸だけど、紛れもない殺し合いだ。

周りに居る人間の多さと熱気に愕然とした。

熱狂、狂乱、血の臭いと武器の旋律に狂喜乱舞する、誰のものかも分らない熱気。奔流に近いそれ。
先頭に立つのは悟空だ。その後、街角に立つ、刺激に飢えた有象無象が続く。退屈さに身が腐る寸前の、獣の欠片を持って生まれてきた、現代の。

ああ、そうか…
これが魂、つてものだ。

何故、ストリートファイトが流行しているのかが分かったような気がする。
有象無象の中で誰か一人でも命を魂を使っていれば、それに引き摺られるからだ。とうに腐ってない筈の魂が稼働するからだ。目一杯、全力で。

「うっ…」

喉が甘く痺れる。

「う、悟空　っ！！」

声が見つともなくひっくり返った。だけど誰も僕を気にしない。
悟空が打ち合いながら、視線をこっちに寄越す。先程とは違う、見とれてしまうような綺麗な笑顔。

「おう！」

ふわり、後ろで括った艶やかな黒髪が尾のように靡く。身を翻す。
「そろそろ…本気出すかあ？」
呟きながら、素早く身を屈め、人差し指を口に突っ込み唾液を付ける。金棒の打撃を受けて砕けたアスファルトの隙間から覗く土を撫でる。

「あんの猿…マジでやるつもりかよ…？」

「はあ、やると思ってたよ。何時かは…」

紅孩児が驚きに目を見張り、黒熊怪が呆れから溜め息を吐く。だが、それは周りの誰にも聞こえていなかった。湿った指先が、素早く、鉄パイプを滑る。

「降りろ、如意棒」

指先で茶色く、豪快に三文字が書かれる。同時に、武器が纏う空気が変わる。

理由は直ぐに分かった。少し具合を試すように振り回すだけで、両端が枝のようにしなったからだ。

明らかに重量が増している。

「やりやあがった…あのエテ公…」

「まあ…半解放位なら、まだどうにか誤魔化せる」

「マジか」

「そもそも悟空の怪力が異常だからどうとでも丸め込める…」

「確かに…」

遙かにしなやかになった鉄パイプ、否、如意棒は、繰り出される動きを遅くする所か益々速くなる。なまじ動きに幅が出た分、黄眉に取ってはやりにくい。おまけに、遙かに重量が増しているから、破壊力も段違いだ。

いかに頑丈な者だとしても、一発食らえば否応なしにブラック・アウトは確実だ。

黄眉もそれは分かっているらしい。ぎりぎり何とかかわしている。

ギン！ギイン！ガアン！

伝説の棍と化した筒が、まるで紙のようにひしゃげながらも猛攻を掛ける。金棒はひたすらその攻撃を受け止めている。

「あ」

折れる。勘でそう思った。そして実際、如意棒が振り上げられた次の瞬間、折れた。

千切れるように折れたものが回転して飛び、アスファルトを砕いて突き刺さる。幸い、人にはぶつからなかったようだが、ぎざぎざの傷跡を剥き出しにする鉄パイプは、如何にも危険だった。

「…これはまずいな」

黄眉が、自慢の金棒を見て呟く。やってしまった、と見た目に似合わない、子供のような顔をしている。

「俺の負けだ。斉天大聖」

太い金棒は、根元から曲がっていた。スプーン曲げのあれに似ている。ぼこりと隆起した喉仏には破損した如意棒の先があつて、今にも皮膚を切り裂きそうだ。

「おう！当ったり前だぜ！」

だが悟空は、笑顔で返した。無惨な姿になった愛用の武器を降ろして、満面の笑み。

血塗れな癖に、本当に無邪気で…魅力的だった。

《試合終了。よく見えなかった人は、試合配信にて観戦を宜しくお願ひします…》

黒熊怪の声が終わりを告げると、空気が変わった。熱狂の種類が変わると言えば分かりやすいかも知れない。皆口々に悟空と黄眉…いや、キヤマをファイターとして称える。ファンなのだろう、悟空に握手とサインを頼もうかと騒いでいる女子高生グループがあちこちに居た。

見れば、今回バトルに参加していないにも関わらず、紅孩児は既に女性陣にもみくちゃにされている。予想はしていたが、頼まれると断れない性分らしい。

「…黄眉老仏か」

「あ、黒熊怪さん…」

悟空はあんなだから仕方ないとして…一体、どんな会話を…

「黒熊怪？つて事は…観世音様の所の」

「ごぶさたしてます。今、仕事は製鉄を？」

「えええええ…！？」

な、何か予想に反してサラリーマンみたいな会話してる。つていうか黒熊怪さん、普通に丁寧語使えるんですね…

「いや、最初は武器製造の鍛冶仕事だったんですが、今は広報兼ねてバトルに参加しています」

「その様子では、もしかや弥勒様もご一緒ですか？」

「ああ、まあ。偶然、師が投胎されたのが新社長の肉体で…」
妖怪とは思えない程折り目正しい遣り取りが始まってしまった。

…何だか妖怪の癖に現代に適応し過ぎてないだろうかと思うのは僕だけだろうか。

「おい、お師匠様（仮）長くなりそうだからジェラート食いに行くぞ」

「い、いいの？」

「いい」

キツパリと言い切った悟空が、頭から流れ、顔にこびり付いた血を腕で拭おうとしていたので、持っていたミニタオルを貸したら、オツサン臭い、とズツパリ切られた。手を引かれて、近くにある移動販売のジェラート屋に直行する。

「おらよ」

何かポーっとしてたらずいっとオレンジ味のジェラート渡された…物凄く自然に奢られた。

なにこのひと超男前。まじカッコイイ。女子だけど。てか何この味のセレクト。可愛い。なにこのギャップ。

「ん？」

え、あ、あれっ…？

「えっ？えっ？」

ちよつと待て。もちつけ僕。これってもしかしてもしかする？とか？

「おい、いきなりどうしたんだよお師匠様（仮）腹冷えたか？」

訝しげに、心配しながらも呆れたように聞いてくる悟空が、矢張り
ずずいつと顔を近付けて観察してくる。頬がぼぼつと燃えるように
熱くなったのが自分でも分かった。

嘘でしょ。

ヤバい、僕、この人が好きだ。

「おっ、おいお師匠様、口から全部垂れてんぞっ！大丈夫かっ！？」
まず、そもそも人じゃないし。妖怪だし。猿だし。総括して言うとな
人外だし。僕より断然男前だし。イケメンだし。ジャ 系だし。っ
ていうか厳密に考えてみると女子かどうかも怪しいし。無理だし。
何考えちゃってるんだ僕。

「おっ、おとおおい つ！？」

びっくりした悟空の叫びを聞きながら、僕は現実逃避と熱中症でア
スファルトへと倒れ臥した。

付録・生活費の一端

「じゃ、ちよつくら行つてきます」

「ああ悟空、待ちなさい。適当な服で出掛けるんじゃないやありません」
何時ものように、観世音が好敵手という名の獲物もといカモを求めて街へと出掛けようとする悟空を引き留めた。

悟空は元々猿だからか、身なりを余り気にしない。今や紛れもないスーパースターであるというのに、普通にダサイデザインの、襟が伸びたTシャツで外出しようとするのだ。それを見かねた観世音が何時もの依怙贖肩…もとい仏心ならぬ菩薩心を發揮して、上から下までバツチリとコーディネートするのがお決まりのパターンだ。

「チッ！おい猿、早くしろよ！」

「別に…急ぐ必要もないよ」
「ぐっ…」

何ムダに焦つてんの、と、苛立つ紅孩児に黒熊怪がクールな突っ込みを入れる。

長い年月を観世音菩薩の徒弟として過ごしてきた義兄弟三人だが、何百年経とうとも、末っ子は長子に対する対抗意識を捨て切れないらしい。クッション役の次子は、呆れと溜め息を通り越して悟りを開いていた。

この末っ子はずっとこうだろう、と。

「紅孩児！お前もですよ。これに着替えなさい」

言いながら、悟空を着替えさせた観世音が、何処からか黒いベストを取り出す。

「は？何で俺まで…」

「紅孩児…これは魔法のベストなのですよ」

す、とさりげなく黒熊怪がノートパソコンを紅孩児に差し出す。

「この某有名ブランド店の新作ベストを着れば、何とお前のバトル動画がクリックされる毎に五円の収入が…」

「何か妙に俺のバトル動画だけスポンサーリンク多いと思ったらそのせいか！」

「因みに、ネット限定でブランドのプロモーションも紅で作っ…た」

「おい熊ア！マジぶざけんな！しばらく！」

つつーかお前が作ってんのかよ！と激しく突っ込む紅孩児を尻目に、悟空が観世音の白衣の裾を引く。

「なあ菩薩様、もしかして俺のもそうなんですかい？」

「いいえ、悟空。お前は違いますよ？紅孩児はファン層が偏っていて収益が少ないので止むを得ずにスポンサーを付けているのです。

これからも悟空は硬派な純ストリートファイターとして売ってゆく予定ですから、安心なさい？」

うふふ、と観世音が笑って、悟空の頬を撫でる。

「っの、ババア…」

暫くお待ち下さい。

「ふう、反省しましたか？紅孩児」

ピ。デジタル緊箍のリモコンが小さく電子音を鳴らした。

床にはただ激痛に滂沱するばかりの紅孩児が転がっている。

「大体：毎度毎度新品の服が筆笥の一番上に収まっている時点でおかしいと思うでしょう。コーディネートまで考えているのですから、感謝して欲しい位です」

「ぢっ、くじょ…おお…」

「それに、今の下界では稼ぎの少ない男など取るに足らぬ存在。所謂甲斐性無しとされているのですから、仕方がないでしょう。御覧なさい。悟空と黒熊怪はこんなにも此の地に適応していますよ？」

「違いよ！猿も熊も適応し過ぎなんだっての！」

「おう、愚弟。ようやっとこの孫様の凄さが身に染みて分かったみてえじゃねえか」「るっせーよ！このエテ公！馬鹿猿！」

「んだとお？やんのかこの餓鬼！」

何時も通りの派手な喧嘩が始まり、安全圏に非難しながら、黒熊怪が吠いた。

「紅って、ある意味残念なイケメンだよね…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9866u/>

悟空転生

2011年10月9日11時46分発行